



青嵐

中村俊定文庫  
文庫 18  
352



河原あし

其日菴編

あをさあし

序

そは南をふのをもあそ書給合といふ  
小冊をいんけりし不重牛巻に抄あり  
六玉川又六所仙より蕉門の血脈流るに  
むねはくし重を打のて地畷の音に重の  
成乾流糸江都に御傑と云へしそま  
序ふ云く依糸似しふとよと墨を流しそ



りふ一白の媚を粉にのりて教ゆを打てふ風を  
候しむれとも流るをあつたてふふ身  
亦まふとてしをるりて好くして風を花を  
めしとて大急又令とて多くてふてし  
け集めうちふ一白の粉をふ送いて所さ  
あり又媚亦惚めてすいふてあつたて  
何白の送ひ書にふうとてささく粗く  
思れをを序の筆をて誅しかし

是也此のよ白や又この流の人も徳を  
あつたけき多くと徒然乃れとふはり  
評して種終りの坂の是杖おもと心  
亦ううふまてと書て人教ふてふう  
思人のうくささくしをるうくをて  
ものかて又あましにすちのふ評し  
いかにあつてしまとて明世松乃  
あつたて序文の執意と流れ

遠い多きこと目一罪文を  
あつらん

宝曆九 己卯

うしし 初日

其日菴

素九書

皇極令十一之欲心



牛飼を牛飼ともおそや  
阿ま〜てまめへの枚 性

冬降白六ヶ家業一こ一為了少てを守元  
う〜き人のあ〜人し降心も牛飼の性  
し〜こそ〜も〜思〜く〜か〜教芸思ふ家不  
こ〜を〜く〜し〜系〜る〜う〜た〜と〜二白めるの心  
解しハ、わ〜も〜ま〜よ〜く〜入め枚城と粉

とらふと一斗の中はに荒風をのめりて角城に  
飛入るるをよのふ咽とふくしし所を  
横より見ゆれば信ふは遠きやちくは  
青陸の峰より名を古抄ふもつゆのし極  
といふる名を管領りくといふしこ下は  
取城の形をともてそとて古れといひて  
ふとあしししうとては風流ふとい  
さるる名は人への知さるるやふりふり  
さるる

荒く〜〜〜とて雨帷

とあふむ早〜荒風やみ物も又〜  
〜〜〜  
〜〜〜  
〜〜〜  
と没〜〜〜

御留る〜下京に

〜  
〜  
〜  
〜  
〜

を降又下京をて降とありて素未  
の此言を念ふれと織田経之云詞一  
句の媚粉ふして更ふ前白不降  
一白に降る所ありて白をたれ江戸の授  
の白ふしてちる言はれ程ふして授さる  
とありてぬきとるぬきと細しに候し  
旅結るるに方不荒れを降しぬを淋  
牙を降て物なり其の有難白如き

不吉に之を降し降方の八幡をて時  
入用ふとて一りく不降ふむと事也  
けきとて之略して倉を町ふとて可降也  
疑ふとてふ言ふとてん

あゝ〜〜〜とて生ふる也

らとて〜〜とて降るを言ふ

きかいらをて降ふとて降し方とてん

弟月二款仙の句

舟中兼や解て下り川七考

七考の舟中夜の雪解と云心うらま  
之心あゆぐて詞と云俗ぬる白を  
云々云々例此置錯の塔柄と云  
一秋歌の舟中言一不易く  
編碎一々形の上言ふ易中言  
比名易今此ふ易と云る易や  
言白の縁よ

夕日こく歌く里七考秋

秋を始る事云云  
の雨水方のも夕月  
と云河況と云云  
并云云腐降と云  
考秋を押す云云  
作と云云考白卯  
降續と云川云云



くも物もつらん如き夕日赤く照らす  
優若に比ふに猶午のまほほたるに  
卯七舟や舟下り川に去  
春に穂よみぬる一  
くもあふと暮る節もほろもほろ合  
まをほろく子ほろ風色もほろもほろ  
ほろあふ川もほろもほろもほろ  
くもほろあふほろもほろもほろもほろ

赤傳、双六盤、舟、川

何れも知れぬ酔を分るは  
此男め一酔句に心解をいふもさるんやあ  
るもさるんやあ酔を分るは  
さるんをさるん何れも知れぬ酔を分るは  
と側へあしとさるんやあ酔を分るは  
さるんをさるん何れも知れぬ酔を分るは  
さるんをさるん何れも知れぬ酔を分るは  
さるんをさるん何れも知れぬ酔を分るは

さうかよしうらまふ

何うききくはなをくくかふ

さうかゆるべし日え記ふ事か井之糸

粒のよきなり一団くくさるともかて座

跡をれも写りあうううふ今うこち糸

ふくさる

お健さゆふ福登ふ財うらて

何うききくはなをくくかふ

さうかよしうらまふ

さうかよしうらまふ

さうかよしうらまふ

さうかよしうらまふ

さうかよしうらまふ

さうかよしうらまふ

さうかよし

さうかよしうらまふ

書福の六

初録ふと年も死するは事なして

七月一日降ぬる也初ふ一方に録す、  
めりふ、  
あふん、  
能降人合せを新しき、  
裏福と初ふ、  
ふもと、  
ふと、  
ふと、

を降下とめ、  
降も、  
め、

降ふ、

降る、

降る、  
降る、  
降る、  
降る、

破らして産みの親の月懐きて来るも  
是れを報申す法也といふ事いふ  
心なき供しかりたかむと願ふを  
振へる懐の月おの縁も縁

親子三人之所に杖

いけりて待る杖場より杖階子  
けさるの運びはれはるを疾と  
考極小具の真氣一はり白の縁と

一氣の妻にるをせそ此にけき打神し  
稲荊男と云うしそ食の窮るる者  
見んはさすは命をさすおかす親  
離れしはる杖に杖をさす月  
ささるるはしそは命をさすに命  
將して道は場との杖白を杖骨  
妻にるはるも無下りて杖をさす  
階子の杖詞は杖をさす杖も

知しより讀く事人懐く心くもてかゝるま  
・文多し人懐く念言てさるくもをりし  
・身も大也河の貫くも也くも麻おとも  
・くへくも念言て及於切をいさしてり地を  
・いふ能く方ん——

・親てよと人く之断り七ある

・流系も乃於切も目——

・とさくしとけりくも父も離れおめ親

・慈く妻ありある・家好しして流系も乃於切  
・病し二如くましく家も之断りくも父好記  
・とま・さく——しよれもさくく・娘くもさくをさく  
・し一人を陰くさくめ之四方ともさく由  
・かくこつさくさくも此麻し流りれも  
・さるれも一人懐く念言てさくもさくくつ  
・ハ娘女母も乃はさく——せ又は

・弟く之・歌仙くも

遊多の如や二いろらむ物一布

けきるる之感る亦と如く勿停徒方のみ也  
あるは場ふふたに晒し布は終るを少く  
ふふたの百とやに格式物さうふふく  
言さぬ向よと古ると作るふふたの如し  
ふふたの如と下結と焼味等めくふ  
ふふたの如

白きまやこくふ下はまの如し布

とくしうあやも又言はれふ合うくふや  
事く布を如くくやと感慮めさるる  
物くあやの如くくやと細布くくく  
詞と如く晒め如くと又ふの詞に備を  
て申ふ金一又

糸物へ何とを麻に衣くくふして  
ふ如ふ新に風くく如く  
ふ入れむく之推めくく櫻七月

そむる月影さるる白きくさるる物も塵  
黄白くさるる燭の風吹あし〜  
人情とさるる場も二百と数くさるる  
解る月と難くさるる〜作者も知〜  
降〜さるるも〜さるるも〜さるるも〜  
〜さるるも〜さるるも〜さるるも〜  
知〜さるるも〜さるるも〜さるるも〜  
情も打解し〜さるるも〜さるるも〜

櫻さるるも〜さるるも〜さるるも〜  
九折道さるるも〜さるるも〜さるるも〜  
扇さるるも〜さるるも〜さるるも〜  
推櫻の月と〜さるるも〜さるるも〜  
〜さるるも〜さるるも〜さるるも〜  
と粉く〜さるるも〜さるるも〜さるるも〜  
〜さるるも〜さるるも〜さるるも〜  
功と横〜

日燭亦折此風極多々々々  
何いふれ下敷七りれり此家  
をんを極くくく燭よ心と云ふて新向  
を七夕よあつて存しよの備おき  
おもふ人ふへ一未履き宵あつて奇を  
えいふよとあつて極を折れよ燭とくく  
他人の感涙もあつて新くを何れぬ  
ふくへし素るるれを忠を極ふへて

是忠をわらふあつて降るるを何れ今  
新をえへし何れを身人守り格方  
え玉集此一極をれし愛の妻紀をん  
ふ新降るるを極め極と云へし  
集めりとも何れと云へし  
何れもあつて何れも来れ夜に  
何れもあつて何れも極れよと云へし  
川を極め袖も何れも何れも



風亦其しく聽虎軍乃下止しんれ  
之をききては人信しる方ては喜ばれ  
弟一之をくはる何れしとて可なりと  
うさささしむとすむとていつと一吹牙近  
事難るは定るとおもむくと女は信と信  
せしはふもやとてきくゆよれと起信の巻  
まおもよとて口して地は女は起信と信  
まらへしは又とてまもをもてきく物ありと

云何なるは信とてきくも信と信し

狐一之をくまれば信とて  
まらとて信とてきくも信と信し

まらとて信とてきくも信と信し  
狐一之をくまれば信とて  
まらとて信とてきくも信と信し  
まらとて信とてきくも信と信し  
まらとて信とてきくも信と信し  
まらとて信とてきくも信と信し  
まらとて信とてきくも信と信し  
まらとて信とてきくも信と信し

従ふを白備比るを物替の儀祈うしめ  
その亦體を車比人信一喜をの地照あ  
しに集仙傳しし人く地に地うを培ては  
らまぬあな近の文行の格きくうーを  
るそのはくを又

あらしくこつ集しとて大く技指し  
あらしく報解とらしくしとてあらしく  
はしそこるいよ若むしうな

諸しはとををまめはこらあが

ふく小相をの降念と傳ふしこるは  
古に集仙傳うきあしん是をてくふは  
とて格をぬまの句何とも降も考ふ  
くくを執るめうあつうう刻きしと若と  
にうらうらぬ申居るとなとて降くふ例の  
遺蹟の存るし又男の癖のねひと精筆  
うらましくあを相くう格あしくうう

久しういひたてぬ月をふりしむる位が  
あふりたてぬ

さしおふるは世にあらぬ

あふりたてぬ

とあらぬまふとあらぬ世にあらぬ  
あふりたてぬ  
あふりたてぬ  
あふりたてぬ  
あふりたてぬ

雁が肥いの笑いとけんとくの極し

この世にあらぬ

人の情とて

あふりたてぬ

あふりたてぬ

小舟はつれも

あふりたてぬ

あふりたてぬ



海と云ふ其の傍に海といふ河の海あり  
いふことありとまじりて海を亭とす  
人として其えやましく人々の白く  
明くうらむれと又うらやましく  
華と云ふこと

法に在るまよきこと利と

あつたまのあつたまの吹雪舟

舟一向に解をいれむらじまのあまのあま

いふこと念をぬくと移るふの遠く吹  
矢の舟やうらむことと云ふこと思ふ  
うまの此理を責むこと蕉の下まき  
思ふこと又去るの舟白く

いふこと東の路をいふこと

舟の今く東の海に揺ると神教舟  
東の海に揺ると舟の舟の舟の舟の舟  
舟の舟の舟の舟の舟の舟の舟の舟の舟

折合をわびくしくし相を序ふ一向所尼  
 側より人の方吹失の月を考るる東  
 岸より吹く白雲のしるる雲のまきふの  
 之吹失くくくくくくくくくくくく  
 今よむにとふくくくくくくくくく  
 至る解其くくくくくくくくくく

つるし女初仙くく

初るくくくくくくくくくくくく

悟華より行く柳樹亦利く

今今くくくくくくくくくくくく  
 くくくくくくくくくくくくくく  
 くくくくくくくくくくくくくく  
 くくくくくくくくくくくくくく

牛くくくくくく

醫考をど所前くくくくくくく  
 馬養畜くくくくくくくくくく  
 儂侶師  
 くる序ん解くくくくくくくくく

原のあへ下りて... 結核... 思ふ...  
 ちや板のた... 思ふ...  
 大書... 思ふ...  
 あ... 思ふ...  
 降... 思ふ...  
 言... 思ふ...  
 思... 思ふ...  
 と... 思ふ...

...を顧  
 ...  
 ...  
 ...

念ひ  
はるまじ

...  
 ...  
 ...  
 ...

化と云ふなりしを

醫と云ふも治すも亦亦此の者

ねと云ふも治すも亦亦此の者

是亦一なるも治すも亦亦此の者

もろくも治すも亦亦此の者

是亦一なるも治すも亦亦此の者

もろくも治すも亦亦此の者

是亦一なるも治すも亦亦此の者

一物ふして其の上物事なるも亦亦此の者

属し物なるも亦亦此の者

是亦一なるも治すも亦亦此の者

もろくも治すも亦亦此の者

是亦一なるも治すも亦亦此の者

もろくも治すも亦亦此の者

是亦一なるも治すも亦亦此の者

もろくも治すも亦亦此の者



いしきや江戸凡のり北理居せきこしして  
をいふふき下結と焼味候たりまじり  
降るちとくへ一又白雲の河法まじり  
ち師の大名よとのん

心くくいり<sup>ふか</sup>あはれはまつく徳信候  
屋あ降そあふ予もも弁茶

と曲言と交へて今く天恵の<sup>道</sup>通舟  
うらぬめ感ふゆふももへるへし候て

報慶とを徳信め訊ひてゆはして新日  
ししん可んて白雲うむらまあふん  
降るの八舞と以て降るへき今めも  
とちりきき略しぬ

おらあなるやうにまきく徳信候  
一雨降るに日とも日方(三)

あかたぶるに候く降るまきとゆれも降る  
くしきのまじりゆらまき成す北候へ

極よしと懐儀をあしふいさふさる此  
打ぬの糸をうらと思ふと月と云河の磐  
ひより晴し日さの御路よをしと世に  
の切ふふとをさるましとあをむいふ  
又もしとさるうらと後よのうとせりし  
たしと色をうらとさるよとさるしと  
集うとさるしとヤさくさるよと云へる  
、取座の片破標と打座し

淋しい時茶臼挽く数

借本の風景をいつてかき出さる

、海を、京を、陸を、海を、うら

晴くしり此素うらふ入し

さるよの運い、取座の板を標と掛く

茶人の儀と序とよとよの方かおを

澄むる時めたりしとら此淋しい

めさるしと茶人とおをと時かおを

きりきりしつかりし一氣の淋しき二餅  
まろ丸ころろ五句くくを寂しき二底て名  
妻尼ふく海もやそあそ集まれば地こし  
こ羅一人よゆを坊も障と入りと時ふめ二  
白も泣きまてさぬまをめするし時々し  
日まへんあしおもつたぬ入し存しりも  
今く夕日め時ふく極く

世といひぬきさ系白挽く

心もささしつかりし一氣の淋しき二餅

海もやそあそ集まれば地こし

こ羅一人よゆを坊も障と入りと時ふめ二

白も泣きまてさぬまをめするし時々し  
日まへんあしおもつたぬ入し存しりも  
今く夕日め時ふく極く  
世といひぬきさ系白挽く  
心もささしつかりし一氣の淋しき二餅  
海もやそあそ集まれば地こし  
こ羅一人よゆを坊も障と入りと時ふめ二  
白も泣きまてさぬまをめするし時々し  
日まへんあしおもつたぬ入し存しりも  
今く夕日め時ふく極く

傳く如き事ありとも又疑ふ事あり

植いしは白く傷く錆七音

大入るや也田を植いしを泥よけりまてり  
つりしはもろきを傷損とて白く傷  
とまよの色の理屈は往後日していつくよ  
風紙の優劣も多やとてはにこそ  
枝葉の新詞。形屋の片破損屋の  
字の下の念をててて。縁の房系も其

一級とてふも際。置性いふも  
の美を考とて古昔にまよりて  
白也。ちいさな顔も顔も就とては  
是をていと侮あはれに去る欲心いり  
の機もや。念に雪片屋若くは血氣  
よ江戸の御友とてそのりして  
よやとてそむかすもいふか  
るもの中へわづらふも後ち

よあし原よれとも救えと云くぬの段より  
摺るよと云く方よりほくまをそ後仙の  
人救してと云く又撰ると思ふも救くさ  
に原生うふ十年の信りとも救くさ  
まきと云くとしかりくへ

兼をもつと云くあす甚く門の所合を門前  
めと信りとも馬お見童も申ふ早ッ入て  
合矣し感と云くは信りともと云くを其の

所合と云くは作の筆と云くは流りたふ免と  
かくと云くはと云くは

谷ては信りとも信りとも砂川と云くは  
と云くは信りとも信りとも一白くは信りとも  
年と云くは物と云くはあし信りとも  
す入早く感して信りとも信りとも人信りとも  
信りとも信りとも信りとも二白くは信りとも  
かひくは信りとも信りとも信りとも信りとも

詞を新り媚を儲て句作るや人智者といふ  
と時をそのひらきくを言と詩人の鄙俗  
とせしむ佛志の極んとてあふりていかに  
まゝなる家心わのまゝうしてまゝの歌也  
その何れぬやうくわたりといふも例の  
ゆかりをう峰は遠ふをよきとわたりて  
おも身んをん見しと言し彼も古し  
と塔梅といふのも廻板ふ並へし極も

又まきともて入るに答へともて味さを知り  
即ち扇新原の五合をよきとてまゝの  
まゝの横の曲で終るまゝ入るがまゝに  
まゝも笑ふも歌のいかに前よりいかに  
まゝも一ふまゝも一ふまゝも一ふまゝも  
初まゝも下もまゝも一ふまゝも一ふまゝも  
まゝも一ふまゝも一ふまゝも一ふまゝも  
まゝも一ふまゝも一ふまゝも一ふまゝも

ハ修し何しし後ハ種多ク此の如く  
之合の月日ししを以て此の如く此の如く  
實を以て之を説法示すも此の如く  
又同く不佞の如く又是を爲野の玉川  
新の如くあり是も亦一の如く  
若以尔勝人してありし志の如く  
しきありし如くありし如く  
山にありし如くありし如く

如く此の如くありし如く  
後人よりありし如く  
愛ふる如くありし如く  
求むる如くありし如く  
此の如くありし如く  
よりありし如くありし如く  
備へし如くありし如く  
とありし如くありし如く

み境のげなふも

ふしあふふもかこふふの作ら身も  
ととし満ふもあもともくい難を他  
ふしあふふもかこふふの作ら身も  
あふふもかこふふの作ら身も  
いし能もして金信を感も  
はあまこもかこふふの作ら身も  
ふしあふふもかこふふの作ら身も

信ふ近き此難にあふことあふ此  
こ野れふまはさしこふふの作ら身も  
あふふもかこふふの作ら身も  
あふふもかこふふの作ら身も  
あふふもかこふふの作ら身も  
あふふもかこふふの作ら身も  
あふふもかこふふの作ら身も

暖



蓼太前承雪嵐と編して江戸二十  
歌仙と碎く我が師のりて是稿とて  
蛙とぞよとふとくしうとて得而何  
と入而評論龜鑑たりと争と同流承  
卒して伯牙琴の割信玄死而謙信軍  
と止むの氣精承ふとくしうとて

